

近江八幡の水郷

近江八幡の水郷は、琵琶湖と近江八幡の町の間にある 354 ヘクタールの保護地域で、水路、ヨシ原、水田、集落が複雑に入り組んだ景観を形成している。この水郷は、交通や漁業のための水路、さまざまな工芸品を作るためのヨシ原など、人間が自然と関わりながら何世紀にもわたって形成してきたものである。地域一帯は日本語で「水の故郷」と意味する「水郷」と呼ばれ、人々の暮らしと密接に結びついた風景を表現している。近江八幡の水郷は国の重要文化的景観に選定されている。

水郷の成り立ち

水郷の中を流れる水路のネットワークは、八幡堀と琵琶湖、その小さな内湖である西の湖を結んでいる。この水路網の成り立ちは、町の歴史と密接な関係がある。1585 年、戦国武将・豊臣秀吉（1537-1598）は、甥の豊臣秀次（1568-1595）に命じて、近江国の支配拠点として八幡山に城を造らせた。秀次は、城下に八幡町（現在の近江八幡市）を設け、商人や職人を招き入れた。城を守るために八幡堀を掘り、琵琶湖と結んで商業の便を図った。また、秀次は公家の船遊びを真似て、船上で茶会を催し、水路遊覧の風習を始めたとされる。

ヨシの栽培と湿地の維持管理

水郷の特徴は、水路に並ぶヨシ原である。高さ 5m にもなるヨシは、丈夫なことで有名だ。ヨシ栽培は何百年も前からこの地域の重要な収入源であり、その材料は伝統的にさまざまな衝立やすだれ、屋根の葺き替え、建築に使われてきた。また、お茶の栽培では、直射日光から茶樹を守るためにヨシでできたシートが使用されている。かつて、ヨシ製品は八幡の商人によって全国に取引され、町に大きな富をもたらした。現在ではヨシ製品の需要は少なくなったが、水郷の集落では伝統的なヨシ細工が受け継がれている。歴史的建造物の屋根を葺き替えるときにヨシが必要になるし、名刺や文房具などヨシを使った紙製品を作ったり、ヨシを麺やアイスクリームの材料となる粉にしたりと、新しい使い方もある。

ヨシ原は自然界で重要な機能を果たしている。ヨシは群生し、根を張り、さまざまな野鳥や魚の生息地や繁殖地となっている。また、湖岸を浸食から守り、水を浄化し、近隣の農地から流出する窒素やリンなどの余分な栄養分を吸収する役割も担っている。琵琶湖は地域の主要な飲料水源であるため、この浄化作用は高く評価されている。

一見、手つかずの大自然に見える水郷だが、実は何百年も前から管理され、育まれてきた風景である。2 月から 3 月にかけて行われるヨシ焼きは、湿地管理の重要な手法の一つである。枯れたヨシを燃やすことで、害虫や病気を抑え、新たな成長を促し、ヨシ原がヤナギなどの木で覆われるのを防ぐこ

とができる。また、春には他の草花が生えるきっかけにもなる。

重要文化的景観としての近江八幡の水郷

かつて日本全国にあった近江八幡のような水郷は、現在ではますます少なくなっている。特に第二次世界大戦後の高度経済成長期には、ヨシの需要が激減し、湿地の大部分が農地として埋め立てられ、湿地の生態系が急速に失われた。近江八幡市は水郷の保全に努め、その努力が報われ、2005 年に近江八幡の水郷は日本で初めて重要文化的景観に選定された。これは、地域の人々の生活や営みとともに発展してきた景観であり、後世に残すべきものであると評価されたものだ。近江八幡の水郷は数百年にわたり地域の人々が環境と共生してきたこと、その環境が伝統的な生業であるヨシ産業に不可欠であることから認定された。